

JAB NOTE9 初版案に対するパブリックコメント及び事務局回答

	コメント 提出者 (敬称略)	条項 No.	行 No.	コメン ト区分	コメント内容	提案	JAB 事務局対応案 (凡例 ○：採用、△：修正等、×：不採用)
1	岸本勇夫	評 価 の 例 示(10 頁 以 降)		T (E?)	「合成相対標準不確かさ」という用語が使用されているが、GUM で使われているのは "relative combined standard uncertainty" であって、"combined relative standard uncertainty" ではない。よって、「相対合成標準不確かさ」と書くべき。	本文書における全ての「合成相対標準不確かさ」を「相対合成標準不確かさ」に置き換え。	
2	岸本勇夫	表 1	表 の 中 の 不 確 か さ 項 目 1 項 目	T (E?)	3800 Bq に対する不確かさとして、標準不確かさ 2.35 %、相対標準不確かさ 2.35 %と書いているが、標準不確かさの方も相対値である。標準不確かさと相対不確かさを並べて書くと、標準不確かさの方は「絶対値」であるとの印象を与えてしまう。この項目では、出展が相	標準不確かさの欄の 2.35 %を削除すべし。	2.35%を削除し 89.3 Bq に変更する。

注：コメント区分には、必ず「G（全般に関するコメント）」、「T（技術的コメント）」、「E（編集上のコメント）」又は「Q（質問）」の区分をご記入ください。

	コメント 提出者 (敬称略)	条項 No.	行 No.	コメン ト区分	コメント内容	提案	JAB 事務局対応案 (凡例 ○：採用、△：修正等、×：不採用)
					対不確かさを与えているので、標準不確かさの部分は、空欄にするか、 $3800 \text{ Bq} \times 2.35\%$ の値を記載すべきである。		
3	岸本勇夫	表 1 及 び 表 2	11/15 頁 及 び 13/15 頁	T	質量測定の不確かさの相対標準不確かさが 0.156% となっているが、正しくない 0.12 g と 0.10 g を二乗和したものを 2000 g で割った 0.0078% とすべき。	0.156% は、 0.0078% に修正すべき。 また、同様の間違いがないか、チェックすべし。	
4	岸本勇夫	表 1 及 び 表 2	11/15 頁 及 び 13/15 頁	E	「 $2,000 \text{ g}$ 」は、「 2000 g 」と表記すべきである。国際的なルールに整合させるためと、細かい表になった時に、 2.000 g との識別性の問題があるため。	$2,000 \text{ g}$ を 2000 g あるいは 2 kg に変更すべき	2000 g に変更する。
5	(株)ヤクルト 本社 五十嵐義晃	4.1.3 表 1	6-7	Q	フィッティングで得られたピーク効率曲線の不確かさを評価する際、残差(測定値とフィッティング値の差)を用いる旨の記載がありますが、アイソトープ協会より購入可能な9核種混合体積線源には ^{134}Cs が含まれておらず、体積線		標準体積線源の核種に ^{134}Cs が含まれていない場合は、多核種標準体積線源を用いた検出効率校正での全ての核種の残差の内の最大値、又は ^{137}Cs の残差を便宜的に用いることを推奨する。 以下の本文の修正及び追記により、 ^{134}Cs の評価について具体的な記述に変更した。 修正及び追加箇所(下線部) <u>このフィッティング式で得られたピーク効率曲線</u>

注：コメント区分には、必ず「G(全般に関するコメント)」、「T(技術的コメント)」、「E(編集上のコメント)」又は「Q(質問)」の区分をご記入ください。

	コメント 提出者 (敬称略)	条項 No.	行 No.	コメン ト区分	コメント内容	提案	JAB 事務局対応案 (凡例 ○：採用、△：修正等、×：不採用)
					源を用いた計数ができな いと考えます。 見解をお聞かせください。		の不確かさを実験などにより求めることは難し い。 <u>そのため、簡易的に多核種ごとの残差(測定 値とフィッティング値の差)により評価すること ができる。なお、標準体積線源に含まれていない核 種(例えば ¹³⁴Cs)のフィッティングによる不確か さは、全ての核種の残差の最大値又は近傍の核 種(この場合は ¹³⁷Cs)の残差を便宜的に用いて 評価してもよい。</u>
6	放射能・放射 線分科会	2	図 2	E	図に試料均質性が抜けて いる	<ul style="list-style-type: none"> 試料均質性を追記する。 図 2 のタイトルを図の下に移動 する 	
7	放射能・放射 線分科会	4.2		T	試料の均質性に起因する不 確かさには、試料粉碎の不確 かさ、粉碎後の試料を容器 に詰める際の不均質さに起 因する不確かさに分類され る。前者は、不確かさを評価 することが難しいのででき るだけ均質になるよう粉碎 することにとどめ、後者の場 合には、試料を詰め替える又 は容器を逆さにして図るな どによって評価が可能。		4.2.8 に、正確に不確かさを評価することは難し いが、予め自ら評価すること及び不確かさ全体へ の影響を最小化するよう試料の粉碎等を行うこ とを追記する。

注：コメント区分には、必ず「G（全般に関するコメント）」、「T（技術的コメント）」、「E（編集上のコメント）」又は「Q（質問）」の区分をご記入ください。